蘇る戦争の亡霊

武者丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蘇る戦争の亡霊

【Ｎコード】
Ｎ７３３０Ｙ

【作者名】
武者丸

【あらすじ】
インフィニットストラトス。その兵器の登場により世界は急速に女尊男卑の歪んだ世界になってしまった。だが、そんな世の中を、そして何よりＩＳとその開発者を誰よりも怨む男が居た。故に彼は、否彼等は立ち上がる。
罰を与えるその為に。

※この作品はかなり原作アンチ要素が強いです。また、作者は可愛い女の子を書けないのでハーレムどころか恋愛も期待しないで下さ

い。

プロローグ（前書き）

処女作になります。若輩者でありますがよろしくお願いいたします。
かなり不定期な更新になると思われますのでご了承頂きたく願います。

プロローグ

ＩＳ～インフィニット・ストラトス～。六年前に開発されたそれにより、世界情勢は一変してしまった。
現行兵器を超えた圧倒的な戦闘力を持つそれは女性にしか扱えるものではなく、僅か４百余りの機体しかないのにも係わらず、「男女が戦争したら三日も持たず男が負ける」と言われるまでになってしまった。
世に言う女尊男卑の始まりである。
　だが、果たしてそうなのだろか？戦争とはそのような単純なものなのであろうか？かつて戦争を経験
した者達は疑問を抱く。もはや戦後という言葉も消えかけている中で、生き残った彼等は思う。
「そんな短期間で済むものであったら、どれほど良かったものか」
多くの咎人を生み、禁忌へと触れる行為があっけないほど平然と行われたあの地獄はそんな単純なもので
ある筈がないと彼等は語る。そして思うのだ。人に其処までの驕りを生ませるものがこの世にあって良いものなのかと。生まれてはならないものではなかったのかと。存在そのものが罪なのではないかと。

ーーーーーーーーーそして「罪」には必ず「罰」が与えられるべきではないかとーーーーーーーーー

そう、罪は必ず罰されなければならない。そして彼等の想いを代弁するかのごとく怒りの拳は振り上げられる。地獄の底から蘇った戦争の亡霊と、彼と同じ名をした少年の血族によって……。

第一話。蘇る不死身の兵士（前書き）

次の話から一旦過去に戻ります。
なのでこの戦いの続きは後程という事になります。

第一話。蘇る不死身の兵士

「四基だけではありませんのよ！」
ードガガガガッ！！ー
不意打ちで撃たれたミサイルが一夏を襲う。慌てて回避行動を取るがまるで獲物を狙う蛇のごとく執拗に追いすがるミサイルを初心者の一夏が振りきれる筈もない。着弾。全てのミサイルが牙を振るい爆煙が辺り一面を覆い隠す。その光景に誰もがセシリアの勝利を確信した。ーーー唯一人を除いて。

「ふん、機体に救われたな。馬鹿者めが」

彼女、織斑千冬の言葉が終わると同時に煙が晴れる。其処には今までとは全く違う純白の一夏の姿があった。
「まさか・・・一次移行！？貴方、今まで初期設定の機体で戦っていたっていうの！？」

驚愕するセシリア。いや、彼女だけではない。アリーナの全員が驚いている。だが一夏はそれには反応しない。俯いたまま、否、まるでこみ上げる何かを堪えるかのように肩が震えている。
　それを見た箒に悪寒が走った。あれは、あの時の彼だと。この一週間の特訓の最後の日、彼と最後に試合する前なにげなくーーそう、少なくとも彼女にとっては本当に何気なくーー聞かれた質問に答えた後の彼と同じだと。

「……ああ、ここからが本当の戦いだ……」

意外なほど静かな声で一夏が呟く。その言葉と同時に手にしていた

ブレードが展開される。
雪片弐型　自らのシールドエネルギーを消費する代わりに相手のシールドを切り裂く諸刃の剣
次の瞬間にはそれを片手に突っ込んで行くと誰もが考えた瞬間
ーーミシリ！！ーー
鈍く、不快な音が辺りに木霊した。その音にセシリアは何の音かと怪訝に思うが、音の後に目に飛び込んで来た光景に我が目を疑った。何故なら猪突猛進に突っ込むものと思われた一夏は未だに静かに立ち、その右手に握られていた雪片弐型の柄が彼の手の中で粉々に砕けていたのだから

「あ…貴方一体何を考えてますの！？自分で武器を壊すなん…いえ、そもそも如何して破壊できるので　すか！？」
セシリアの反応は最もだろう。初期設定で戦っていたというだけでも驚愕なのにせっかく手に入った武器を自らの手で破壊したのだ。それも素手で。
確かにＩＳにパワーアシスト機能は存在する為常人よりも優れた膂力を発揮できる。だが少なくともそれに使われる以上、武器もまた頑強に作られている。一夏がした事は言わば生身で真剣の柄を握り潰したようなもの。彼女の驚愕も無理も無い。その問いにようやく一夏は顔を上げる。だがそれを目にしたセシリアは恐怖した。いや、彼女だけではない。箒も、アリーナの女生徒も、そして肉親でありかつてブリュンヒルデと恐れられた千冬までが恐怖に震え上がった。何故なら其処にあるのはついさっきまで戦っていた戦闘初心者の頼りない顔ではなく
「言っただろう……本当の戦いはこれからだと、そう、茶番劇は終わりだと！！」

ーーまるで逆鱗に触れられた龍の如く、激しい怒りの炎を瞳に燈し、地獄の鬼もかくやと言うほどの恐ろしい表情をした顔があったのだからーー

「セシリア・オルコット。俺はお前に言った筈だ…専用機乗りってのはそんなに偉いのかと。」

「な……貴方今更何を言ってい「ガシィ！」！？何をしてますの！？」

一夏の言葉に自尊心を刺激されたセシリアは反論するがその言葉を遮るように更に驚愕すべき行動を彼はする。自分…白式の背後に手を回し、ＩＳの心臓部そのものであるコアのある部分に先ほど恐ろしい握力を見せ付けた手を乗せ、否、掴んでいる。既に手の周囲を中心に亀裂が広がっておりミシミシと金属の軋む不快な音が辺りに響く。まるで白式の悲鳴のように

・・・

「言っただろ・・・専用機乗り如きがそんなに偉いのかと！！」

ーメリメリッ！グシャア！！ー

その言葉と同時に装甲が割け、中から黒い球状のモノ…コアが掴みだされる。それと同時に一夏、否、白式が力を失い落下してゆく。

「勝者、セシリア・オルコット」

百式のエネルギーが無くなった事を感知し、無機質な合成音声が彼女の勝利をつげる。

だが、それは、

「「一夏！？」」

「キャアアアッ！！！？？？」
「織斑君が死んじゃう！！？」
女達の悲鳴に遮られ誰にも届く事がなかった。無理もない。ちょっとした高層ビル並みの高さから人が自由落下ーしかも機能停止して鉄屑同然のＩＳを纏ったーしてくるのだ。数瞬後に地面に広がるであろう血と肉の花、ミンチになった死体を想像し誰もがパニックに陥る。
だが
「ハァッ・・・・タァ！！！」
「「「「え・・・？」」」」
裂迫の気合とともに白式が脱ぎ捨てられる。いや、それだけではない見れば何時の間にしていたのか彼の両手両足にパワーリストとアンクル、更にはご丁寧にパワーチェストまでがつけてあったのだ。それ等を素早く取り外すと地面に向かって周りに飛び散る白式のパーツに向かって拳を振るっていく。その度にまるでガラス細工の様にパーツが粉々になっていく。
ードゴオ！！バキン！グシャア！！ーそのたびに耳障りな破壊音が辺りに響く。正に白式の正真正銘の断末魔の叫びが辺りに響く。
余りの光景に誰もが目を疑う中
ードドゴン！ドドゴン！！ドッゴオオン！！！ドゴゴゴゴゴ！！！！ー
「キャアア！？」
凄まじい轟音とともにアリーナに激しい揺れが襲い掛かる。この上大地震でもおこったのかと皆が恐怖する中ゆっくりと揺れは沈静化して行く。その事に安堵し始めている中、ふとある女生徒がグランドを見て震え出し、それを心配した友人が駆け寄る。
「ちょっと、大丈夫？」
「あ……あ…アレ……！！見て！！！」
「アレってな…！？」
彼女の震える指先の先を見れば幾つもの巨大なクレーターが地面を抉っている。そしてその一つの中心に小さく見えるものを見たとき、

彼女もまた恐怖に震えた。
　あれはパワーリストだ。今落ちている彼がつけていたものだ。ＩＳのパワーアシストシステムとはいえあんな馬鹿でかいクレータを作るようなものをつけてホイホイ動かせる筈がない。いや、そもそも彼は何時からつけていた？態々決戦にそんなものをつけて行く筈がない。ならば考えられるのは普段…！？

「化物…化物だわ千冬様の弟にしたって限度があるわよ！？」
「というか本当に人間なの？！サイボーグだって言われた方が納得できるわ「ドリャァァァ！！」　！？」

突如響いた咆哮に目を向ければ一夏が丁度最後のパーツー羽根のある胴体部分ーに蹴りを入れながらグラウンドに落下してきた所であった。再び轟音と共に大地が震えその衝撃に必死に耐える。やがて振動が収まった時、グラウンドには巨大なクレータができており、その中心には白式の残骸を踏み付け仁王立ちし、遥か上空のセシリアを睨み上げる一夏の姿があった。
「セシリア・オルコット」
「ッ！！？な…んで…すの…？」
言葉尻が、いや全身から震えが収まらない。第三者が見ても今までの行いは常軌を逸し過ぎているのだ
当事者の恐怖は押して測るべきであろう。むしろ口を利けただけでも僥倖と言うべきか。
そんな彼女を尻目に一夏はゆっくりと右腕をあげ、その手に握ったコアを掲げる。
「お前は言ったな。俺をＩＳの事を知らぬ素人だと。ならばお前は知っているか。ＩＳのコア、その正式名称を。そして知っているのか？ＩＳのコアを増やせない本当の理由を！」

「コアの…正式名称…？増やせない理由なら開発者の束博士がコア

の開発を拒んだからではありませんの…？」

「そうだろう。お前は、いやお前達ＩＳ乗りは何も知らない。何も見えてない。白騎士事件の真相も疑わずにその力に魅せられ、圧倒的力で全てをねじ伏せられると。だがな。戦争ってのはそんな簡単なものじゃない。お爺ちゃんによく聞かされたよ。爺ちゃんは戦争に行ってはいない。だが爺ちゃんの兄弟は戦争の名の下に生まれ、その罪を一心に背負い二度死んだ。爺ちゃんだけじゃない。戦争で地獄を見たのはどこだって同じだ。だから爺ちゃんは誓った。もう二度と戦争を起してはならないと。この荒涼とした命のない大地を広げてはならぬと。そして平和になった世の中で兄弟に三度目の命を与え、今度こそ胸を張って平和の為に生きていこうと。

その為に爺ちゃんは研究を始めた。兄弟を蘇らせる為、そして父が夢見た新エネルギーを別の形で生み出し平和利用する為の研究、太陽エンジンの開発を」

「太陽…エンジン？」

「ああ、太陽光発電の様に太陽から無限のエネルギーを得るシステムだ。兄弟にはバギュームという新元素を使った動力システムがあったが、ソイツは太陽爆弾と呼ばれる爆発すれば地球を死の星にする最終兵器だった。そんなものを兄弟にまたつける訳には行かないし、エネルギー問題とかも視野に入れて
考えて、完全無公害の強力なエネルギーを模索しそして太陽に目をつけた
もう二度と兄弟に地獄を見せない願いを込め、その動力源に太陽エンジンと名をつけて」

「ですがそんな夢の様なエネルギーなど夢物語も良いところですわ！」

「その通りさ。だが爺ちゃんはそれを諦めなかった。やがて結婚し子を授かると子供は誰に強制されるでもなく、その研究を手伝いだした。その夢に惹かれて。やがてその子供も成長し孫が生まれる頃になり、やっと予定より低出力とはいえ、かなりの出力を持った試作型が誕生した。一先ずはそれを先行型として量産する事にした。小型で超出力、無公害のそれは丁度世で騒がれている環境問題対策にうってつけだと。自分達が作ったものが平和の為に役立つのだとだが、そんな願いをあざ笑うかのようにその試作型は盗まれた。ご丁寧にふざけた制限設定をつけられ、爺ちゃん達が最も嫌った戦争の道具として！！」

「盗まれた？試作品が？一体なにを…！？あ、貴方それは本気で言ってますの！？」

一夏の言わんとする事に気づいたセシリアは驚愕した。何故なら一夏の言わんとしていることは

「そう、その通り。ＩＳの根幹たるコア技術の開発者は束なんて兎女じゃない。真の開発者は・・・」

ＩＳという兵器の大前提を覆す

「我が祖父金田正太郎と、その息子夫婦・・・俺の両親だ！！だからアイツはコアを作れない、いや作れない！アイツはシステム弄るのは確かに天才。だからコアの設定を弄くっただけだ。ハードであるコアの製造は不可能！！」

衝撃の事実なのだから。

「白騎士事件。あのせいでせっかく完成した量産太陽エンジンは散り散りになった。いやそれどころか平和を願って作られたのに、それとは最もかけ離れた戦争の道具にされ、あまつさえ女にしか扱えないというふざけた設定の性で女尊男卑という歪んだ世界を生み出してしまった。
……今でも目に焼きついてるよ。ひい爺ちゃんと兄弟の名を叫びながら悔し涙を流し、詫びる爺ちゃんと、茫然自失となった両親を。自分達に幼いながらも協力してくれたと思った少女に裏切られ、自分達が大罪を犯してしまったのだと後悔してる様を」

もはや今日何度目と数え切れない驚愕にセシリアは打ちのめされる。加えて親と言う言葉が彼女の胸を抉った。何故なら彼女も親の遺産を守らんと必死に努力してきたのだから

「聞こえてるんだろう！篠ノ之　束！！そして織斑千冬！！」
「一…夏…」
一夏が吼える。天をも轟かす程の怒りを孕んだ声で。それを耳にした千冬は信じられない程か細い呟きをする。たった一人の肉親に、大切な家族と思っていた少年に憎しみをぶつけられる姿は鬼教師と呼ばれているとは思えない程、小さく、目には生気が消えうせていた。
「聞いての通りだ！俺は貴様等を許さない！！爺ちゃんと父さん母さんを泣かせた貴様等を！！！」
その迫力に皆が圧倒される。野生の獣のごとく荒々しい気迫に当てられ誰もが身動きがとれない。

「だが一つだけ、そう、たった一つだけ貴様等に感謝をする事がある。」
「え・・・？」
その言葉に千冬の目に僅かだが生気が戻る。もしかしたらまだ姉弟

に戻れるのではないかと淡い希望と共にーー勿論それはすぐ絶望へと変わるのだがーー

「貴様等の行いで悲しみにくれた爺ちゃん達、そしてそれをみて異常なまでの怒りに震えた俺に反応したんだ。たった一つ。実験継続の為に残しておいたコアが。その時のデータのおかげで滞ってた研究が全て進み、六年の歳月を経て当初以上の性能で完成したのさ。
…正真正銘、無限の力を持つ太陽エンジンとその力で蘇った爺ちゃんの兄弟…もう一人の正太郎が！！！」

言葉と共に一夏は古臭いデザインの操縦器を取り出す。それと同時に辺りに轟音が響き渡る。だが、その轟音にまぎり途切れ途切れに獣の吼えるような声が聞こえてくる

「さあ、見るが良い！！」
ガ・・・ォ・・・途切れ途切れの咆哮が段々とはっきりしてくる。
「戦争の名の下に生み出され、戦争の名の元に二度死んだ者を！！」
アリーナ上空に青い点が見えそれがどんどん大きくなっていく。
「我が祖父と同じ名を持つ家族を！！」
アリーナに巡らされたシールドをまるで紙のように引き裂き大地に降り立つ
その名を！
「不死身の兵士と呼ばれた彼を！」
その名を！
「日本の礎となり水底深く沈んだ彼を！」
その名を！
「最後の最後まで兄弟を守ろうとした漢を！」
その名を！
「戦争の罪を一身にその身に背負った漢を！」
その名を！

「鉄人２８号…またの名を正太郎！！」

・・

金田一夏は吼える。この歪んだ世界を壊そうと。そして思う。これこそが自分達の贖罪であり、断罪でもあるのだと。その彼の熱き血潮を受け、鉄人も吼える。血は流れずともこの身体には同じ想いが、魂が篭っているのだと。ゆえに彼もまた吼えるのだ。

ガオオオォォォオォォ！！！！

自分の魂の命ずるままに。

第一話。蘇る不死身の兵士（後書き）

鉄人登場。しかしいくら今川とはいえ一夏を超人にしすぎたかも
唯でさえ超人濃度低めな鉄人なのに
一応全世界に喧嘩を売る上、鉄人のシステム上操縦者狙われたら終わりという
事で強化したのですけどなんか書いてる内にドンドン強くなっちゃったんですよね
しかし文章で動きを表現するのがここまで難しいとは参りました。
やたら説明臭くなってますし。
次回からは白騎士以前まで遡って生い立ちを明らかにしていこうと思ってます。
何故一夏が両親と面識がはっきりしてるのかはその時に。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7330y/

蘇る戦争の亡霊

2011年11月22日03時54分発行